

国文学研究資料館報

第25号

昭和60年 9月

— 展望と共同研究 — 鎌倉時代擬古物語研究の現況

平林 文雄

平安時代の作り物語の伝統を継承して鎌倉時代に創作された物語を一般に擬古物語と称する。軍記(戦記)物語や歴史物語と区別する名称でもある。それらに属するものに、長短とりませ二十五篇ないし三十篇近くが存在する。しかし鎌倉時代文学の研究領域の中では、この分野の研究が最も立ち遅れている。

その中で、最も研究の進んでいる作品は、『我身にたどる姫君』と『在明の別』であろう。前者には、金子武雄氏による架蔵本の翻刻(古典文庫)とその研究(物語文学の研究—本文と論考)、書陵部本の影印の刊行(汲古書院)があるほか、平林による対校本、徳満澄雄氏による全注釈、今井源衛氏・春

秋会各氏による全訳・研究があるなど、平安時代諸物語の研究に遜色のない所まで進んでいる。宮田光氏による総索引も既に完成しており、その刊行が待たれる。後者には、古典文庫の翻刻、大槻修氏による研究(桜楓社)、対訳(創英社)があるほか、注付きのテキスト(桜楓社)も行なわれており、平林による総索引の刊行も準備されているなど、基礎的な研究は殆んど揃いつつある。

戦前から研究されつつあるものに、『とりかへばや物語』、『松浦宮物語』、『住吉物語』、『石清水物語』がある。『とりかへばや物語』は、戦前において校註国文叢書12、校註日本文学大系2、国文大観3、日本文学全書4、博文館叢書等に活字

目次

鎌倉時代擬古物語研究の現況：平林文雄……………	1
三十六人集諸本の研究……………新藤倫三……………	3
マイクロ資料目録データベースのオン	
ライン検索の実証実験……………情報処理室……………	4
評議員、委員等名簿……………	6
●文庫紹介④……………9 ●新取資料紹介②……………	15
文献資料部事業報告……………福田秀一……………	8
研究情報部事業報告……………棚町知湖……………	10
整理閲覧部事業報告……………本田康雄……………	11
「国文学研究資料館資料利用規定」の改正について……………	12
利用者へのお知らせ……………	17
昭和六十年度秋季学会開催一覽……………情報室……………	18

化され、テキストは普及していたが、その割に研究は進まず、戦後に至って鈴木弘道氏による諸本研究(昭48)、本文と校異(昭53)及び総索引(昭52)が刊行され、また作家による現代語訳も行なわれるなど、一挙に研究は進展し、最も進んだ状況にあるといえる。『松浦宮物語』は、戦前において続群書類従物語部、岩波文庫等の活字化されたものが存在したが、研究には必ずしも見るべきものはなく、戦後に至って桂宮本叢書物語2、角川文庫による翻刻、古典籍複製叢刊(雄松堂)による複製が刊行され、それに伴って内容の文学的研究も進展し、また菅根順之氏による総索引が刊行されるなどして、『とりかへばや物語』に次ぐ研究の進展した作品となっている。『住吉物語』は、明治以降、群書類従物語部、校註国文叢書14、校註日本文学大系5、国文新訳文庫、国文大観4、日本古典全集、日本文

学全書1、博文館叢書10、有朋堂文庫、住吉物語本文篇(横山重、昭18)など、戦前においても十種の活字化されたものが存在し、戦後においてもテキストの活字化は着々と進行しており、他方、桑原博史氏や三角洋一氏等による内容研究も鋭意進められつつあるというものの、何分にも現存するもの約百数十本といわれる写本数の多さも手伝って、必ずしも十分な研究の進展状況にあるとはいえない。『石清水物語』も、戦前において、続々群書類従15、校註日本文学大系5に本文が活字化されているにも拘らず、野々口精一氏、後藤丹治氏が僅かに論ぜられているほか、戦後において新たに活字化されたものは桑原博史氏による京都大学本の翻刻の一本以外になく、内容研究においても桑原博史氏外二三の方々の論考があるのみで、これらの作品の中では最も研究の立ち遅れたものと言ってよいであ

ろう。

これらに次ぐものとして、主として戦後に研究が始まったものに、『なよ竹物語』（鳴門中将物語）、「あさちが露」「苔の衣」「木幡の時雨」がある。「なよ竹物語」は極めて短い作品であり、平林による諸本研究、現代語訳、総索引等が作られていて、一応の基礎的研究は揃っているもの、なお絵巻物との関連など、一層の検討を必要とするであろう。「あさちが露」には、古典文庫の翻刻と大槻修氏の研究（桜楓社）があり、注付きのテキスト（桜楓社）も行なわれているが、なお全注釈、全訳などの基礎的研究を押し進める必要があり、平林によって企画されている総索引の作成も急がなければならない状況にある。「苔の衣」も、尊経閣文庫本の複製、古典文庫の翻刻のほか、東京教育大学における演習の成果をまとめたとされる日田正氏による校本の存在など、比較的本文の提供は進んでいると思われ、当該校本が学内者を対象とした油印による少数の刊行であったため、研究者間にも行き互るには至っておらず、また対校した写本の数も必ずしも多いとは言え

ず、不十分な状況にある。一方文学的な研究については他の作品に比して論及された著作物の数は多いといふもの、もとより充分な状態と言ふには程遠いものがある。「木幡の時雨」は、玉上琢弥氏、田村悦子氏、樋口芳麻呂氏による文献学的な研究のほか、大槻修氏による影印本の刊行、総索引（和泉書院）の作成があり、基礎的な研究の進展は著しいとはいえ、なお全注釈等の速かな刊行が待たれる。

『しのびね物語』『海人の刈藻』については、前者が書陵部本の翻刻（桂宮本叢書）、桑原博史氏による東京教育大本の翻刻（中世物語の基礎的研究）、小久保崇明・山田裕次氏による蓬左文庫蔵二本の対校本、並びに両氏による上記三系統本を校合した対校本しのびね物語（和泉書院）が刊行され、平林文雄・島田早苗による対校本と全訳も完成している、刊行されれば基礎的研究は出揃うことになる。後者は、宮田和一郎氏による研究『古典文学』所収のほか、校註あまのかるも（養徳社）があり、書陵部本の翻刻（桂宮本叢書）もあるが、現存十五本の伝本の翻

刻も不十分な状態にあり、現在、平林と島田早苗の手許で進められつつある善本を校合した対校本と全訳の完成が待たれる程度に基礎的研究も遅れている。

『恋路ゆかしき大将』『夜寝覚物語』については、前者が金子武雄氏架蔵本の翻刻（筑波書店、昭11、物語文学の研究、昭49）のほか、その統編の五巻目と覚しき書陵部蔵の錯簡本も翻刻（桂宮本叢書）されており、それに関する研究も中野幸一氏、小木喬氏などによってなされているが、なお注釈書、総索引などは刊行されてはおらず、僅かに宮田光氏による全訳（東海学園短大国文）が進行しつつある状況である。後者は金子武雄氏架蔵本の翻刻（古典文庫、昭29、物語文学の研究）があるほか、書陵部並びに神宮文庫分蔵の三巻までの旧三条家蔵の別本の影印（汲古書院）が刊行されており、両者を対校した校本が平林によって作成（木更津工業高専紀要7（9号））されているが、総索引については宮田光氏の手許で現在進行中であり、注釈、全訳等については全く未着手の状態にある。

『夢の通ひ路物語』は蓬左文庫

蔵本が唯一の伝本であり、その影印は汲古書院から、翻刻が工藤進思郎氏らにより福武書店から刊行されているが、注釈、全訳、索引などの作業はまだまだ全く未進行の状況の如くである。

これらのほか、戦前にテキストの刊行されているものに、『山路の露』『風につれなき』『兵部卿物語』『小夜衣』がある。『山路の露』には統群書類従18上、定本源氏物語新解（金子元臣、昭3）所載のものがあり、戦後も三種類ほどが刊行され、源氏物語終巻の「夢の浮橋」を書き継いだものという異色性から、やや注目されている。『風につれなき』及び『兵部卿物語』には統々群書類従15に唯一の翻刻があるが、両者ともさして注目されず、戦後に至って宮田和一郎氏の注釈付き翻刻、及び最近の高橋正治氏による統々群書類従本を底本とし、実践女子大学本・慶応大学本を校合した校本並びに慶応大学本の影印の刊行された後者の研究の進展が大いに期待される。『小夜衣』には校註異本堤中納言物語があり、戦後に松尾聰氏による古典文庫版、また桑原博史氏による書陵部本の翻刻が出されている。

他に戦後に初めてテキストの提供された作品として、「いはでしのぶ」に古典文庫、桂宮本叢書の翻刻、吉田幸一氏の対校本、小木喬氏の「本文と研究」があり、「しづくに濁る」に山岸徳平氏の翻刻、中野幸一氏の翻刻及び論考があり、「風に紅葉」は、書陵部蔵の唯一の伝本が桂宮本叢書に翻刻され、

「松陰中納言物語」は、吉田幸一朝倉治彦氏による東北大本と天理本との校合本（古典文庫）と尊経閣文庫の複製及び大橋千代子氏による翻刻（共に古典文庫）が刊行されている。「むぐら」には書陵部本の巻三が桂宮本に翻刻されているほか、最近、常磐井和子氏による「二巻本むぐら」(昭60)の影印本が刊行された。「別本八重律」は吉田幸一氏蔵の富士谷成学書写の唯一の本が「中古文学」創刊号(昭

―展望と共同研究―

三十六人集諸本の研究

新藤 協三
藤田 洋治※

このところの「私家集大成」や「新編国歌大観」などの刊行によつて、和歌の研究そのものほもち

ろんのこと、個々の歌人やその家集への関心も大いに深まってきている。

42)に翻刻され、「やへむぐら」には静嘉堂文庫蔵本と吉田幸一氏蔵二本の計三本が知られ、三谷栄一氏の翻刻と今井源衛氏の翻刻(古典文庫)が存在するなど、テキストの提供は一応はなされてはいるものの、本格的な文献学的な研究はもとより、文学的な内容の研究に至ってはまだ糸口についても言えない状況にある。

これらの諸物語について、基礎的な文献的研究を中心に、文学的な研究をも目指し、鎌倉時代物語の研究」は発足する。本年度は差し当って、若干研究の進んだ「海人の刈藻」「石清水物語」「苔の衣」の三作品を取り上げ、でき得れば明年度以降も継続して鎌倉時代物語の全般に研究を及ぼしたいと考える。

(群馬県立女子大学文学部教授)

そして、歌人やその歌人の歌集である「家集」への研究も多くなされるようになったが、「私家集大成」などの歌集の刊行によつて、諸所に伝存した貴重な本文や、異同の多い伝本の内容まで目にするのが可能となり、個々の家集の本文批判的研究までもなされているのが現状である。

ところで、三十六人集は、三十六人家集、あるいは歌仙家集という呼称もあるが、三十六歌仙の家集を集成したものである。三十六歌仙は、藤原公任が選んだ三十六人撰に基づくもので、人麿、躬恒、家持、業平など、万葉歌人以降古今、後撰・拾遺の三代集までの歌人である。この三十六人の歌人のそれぞれの家集の集成の一セットが「三十六人集」となっている。

この三十六人集の成立の過程などについては、既に久曾神昇博士の詳細な研究成果なども出されているので、省略するが、三十六人集は、呼称を異にするものも含めると、数多くの写本が現存している。それら諸伝本の系統を大きく分類すると、正保版本歌仙家集本の系統と、西本願寺本三十六人集本の系統に二分できる。他に、書陵部

蔵(510・12)本(甲本)三十六人家集が伝存するが、この本文は「御所本三十六人集」として影印刊行されている、ほとんどの家集が特異な本文を保有した珍しい伝本である。この書陵部蔵(510・12)本を除くと、他の三十六人集はおおよそ正保版本歌仙家集と西本願寺本三十六人集とのいずれかの系統に分類できることになる。

しかしながら、三十六人集は、三十六人の個々の家集の集合体であり、個々の家集はそれ自体で独立した歌集となり得るのである。従来の研究のほとんどは、その個々の家集の本文に関するところに主眼がおかれていて、大きな二つの系統、西本願寺本三十六人集の系統と正保版本歌仙家集本の系統が、他の三十六人集においてどのように混在を示しているかといった見方は、島田良二氏が触れられるもの以外にないのである。

例えば、貫之集ならば、貫之集を、正保版本歌仙家集本系統、西本願寺本三十六人集系統、さらに書陵部蔵(510・12)本やこれらとは全く異なる呉文柄氏蔵本や伝行成筆本の系統をあげ、その共通祖本の性格を探り、かつ成立を考察する

研究が主であった。このように、個々の家集における本文研究、調査はかなり進んでいると言いが得る。

この度の共同研究においては、家集毎のこうした本文研究を踏まえたうえで、三十六人集全体を一つの作品として、西本願寺本三十六人集と正保版本歌仙家集の二大系統がいかなる形で混在しているのか、また、その二つの系統以外の他の系統の本文をもつ家集がはたして現存するのか、また現存するのたらいかなる分布状況にあるのか、という点を中心に調査していくことにしている。

具体的には、三十六人集の個々の家集の本文系統の整理、及び、国文学研究資料館に紙焼写真とし

昭和六十一年度共同研究の公募

変更のあった事項について

当館の行う共同研究は、以前から実施してきた当館の企画による研究のほか、昭和六十年から研究計画の公募を行い、本年度は四件を採択し、既に実施している。

昭和六十一年度の共同研究計画も本年度と同様公募されている。

公募要項は、この館報25号にも添付されているとおりで、ほぼ前

て収められた三十六人集と当館未収録の伝本とをまず整理し、続いて、伝存する三十六人集を調査・分類しながら、西本願寺本三十六人集系統と、正保版本歌仙家集系統の混在状況、全く異なる系統の本文が混入しているか否かという調査を通して、三十六人集の個々の家集間における相互のかかり合い等を明らかにし、三十六人集の名の下に一つの集合体として伝存してきたものが、その伝播、あるいは転写などの過程において、相互にどのよう

に影響し合ってきたのか、いかなる形での補充がなされたのかという点を明確にしたいと考えている。

（国文学研究資料館助教授
※鶴岡工業高等学校講師）

回の公募と同様であるが、初年度の経験により、共同研究委員会の審議によって若干の修正が行われた。修正された主な内容は次の点である。

- (1) 館外の研究者二名以上の参加を必要とするとしたこと
 - (2) 研究代表者は大学院生以外の参加研究者とするとしたこと
- なお、来年度も本年度同様研究期間は原則として年度内としている。

（共同研究委員会 山中）

マイクロ資料目録データベースの オンライン検索の実証実験

情報処理室

一、はじめに

毎年刊行しているマイクロ資料目録の書誌データを累積し、データベース化し、これを情報検索システム（日立製作所製ORION）により、情報検索の実証実験を行っている。

この実証実験の目的は次のとおりである。

- (1) 別途検討中である原文書システムの最適な索引法、データ構造等の検討を行うこと、
- (2) 将来、古典籍総合目録システムとして、データベースの統合化を計るに当たっての必要な知見、情報を得ること、

- (3) オンライン目録としてのユーザインタフェースに必要な機能の検討を行うこと、
- (4) 本を探すとすることのための支援システムのあり方について、必要な知見を得ること、

- (5) 試行サービスを通じて、運用上の諸問題を整理し、解決すること。

一方、本実験では実験上必要最小限の機能のみ実現化し、実験を通じて、例えば利用の容易性等についての知見を得るという方法を採用している。したがって、使い勝手等については現段階では、殆んど考慮していない。

ただし、本年4月1日より試験的に公開を行うに当たり、大巾なシステム上の手直しを行い、試行サービスに供してきている。

二、システムと準備

マイクロ資料目録における書誌的データ項目は、約五〇項目にのぼる。これらのデータ項目は、冊子体目録作成にとつて不可欠な項目であり、そこには、古書の日録法についての当館の永年の知識と経験が集約されている。

これらデータ項目を眺めてみると、大別して書誌事項（著者名、書名、書肆、刊年）、所在事項（所蔵者、函架番号等）、及びサービス事項（請求番号、フィルム形態、サービス区分等）から構成されて

名 称	PREFIX	型
請求記号	SEI	数字+記号
著者名(読み、表記)	A	読み+漢字
書名(読み、表記)	B	読み+漢字
書肆(読み、表記)	SHO	読み+漢字
出版地(読み、表記)	CHI	読み+漢字
記載刊年	KA1	漢字
刊年	KA2	漢字
西暦刊年	KA3	数字
所蔵者コード	SHC	記号
函架番号	KAK	漢字
所蔵者名	SHM	漢字
収録目録	NEN	数字+記号
(著者名(表記))	AK	漢字
(書名(表記))	BK	漢字
(書肆(表記))	SHOK	漢字
(出版地(表記))	SHIK	漢字
統一書名読み	TOY	読み

表1 キー項目

①書誌データから、ある特定の(所望の)本を同定し、
②サービスデータから、そのフィルム形態やサービス状態

というプロセスを経る。したがって、データベースとしては上記プロセスを実現するデータ構造とデータ操作システムが必要となる。データ構造の面からは多様な活用を考慮すると、関係型

いることが分かる。すなわち、一つの本(マイクロ資料)は、三つのデータカテゴリにより同定されている。
③必要ならば、所蔵データから原資料へのアクセス方法を

を知る。また、知る。原資料へのアクセス方法を

<注> *読みを用いず漢字で検索する場合

の正規化した構造が望ましいと考えられるが、ここでは一応ORION下での簡易階層型モデルで実現することとした。

表一は、今回採用したデータ項目のうち、キー項目13種を示す。ここで、書名については統一書名と記載書名を統合して検索の対象としている。著者名については、

姓と名は区別しないで、前方/後方一致等の検索機能でカバーすることとした。なお、累積にあたって各冊子体目録の刊行年を収録年フィールドとして追加した。一方、各年度版を単純に累積しているために、正誤表等のデータ訂正については実施していない。

また、表一にも示すように当データベースは日本語データベースであり、情報検索に際しての入力機器の機能から考えて、カタカナ入力を原則として考慮している。

このための表記に対する適切なヨミの付与が不可欠である。ただし、最近のパーソナルコンピュータ等を端末として用いる場合は、表記を直接ローカル処理を経た上で入力できるため、直接、漢字表記で検索することも可能としている。

基本的には、検索結果としての

情報は、冊子体目録と同程度の情報が得られることを原則としている。検索機能は、従来開発してきた論文検索システムにおけるサブシステム、モジュール、機能、ノウハウ等を極力流用した。ユーザインタフェースについては、ORIONの裸の機能をそのままの形で用いている。

三、サービス形態

本年4月1日より、マイクロ資料目録データベースの、オンライン利用が、閲覧カウンタにて館外利用者の直接利用方式により試行されている。本システムは、現在試行的にプロトタイプとしてORIONにてサービスしているにすぎないため、例えば閲覧カウンタで、カード目録等から資料を探するというような特定の目的を意識して作られていない。

そこで、本年度では、利用者の声を広く集め、また、データ校正作業を累積版目録(冊子一本)作成に合わせて行うこととしている。多様な要求や問題点のシステム分析を経た上で、次年度システムのバージョンアップを行ない、より使い勝手のよいシステムを構成する計画である。

国文学研究資料館評議員名簿

- 任期 昭和59年7月1日、昭和61年6月30日
- 阿部秋生 実践女子大学文学部教授 東京大学名誉教授
 - 伊地知鐵男 国学院大学名誉教授
 - 白田甚五郎 立教大学文学部教授 日本近代文学館理事長
 - 小田切進 国学院大学名誉教授
 - 加藤周一 愛知大学名誉教授
 - 久曾神昇 早稲田大学文学部教授
 - 児玉幸多 学習院大学名誉教授
 - 齋藤正 国立劇場長
 - 阪倉篤義 甲南女子大学文学部教授 京都大学名誉教授
 - 佐藤喜代治 フリス女子学院大学文学部教授 東北大学名誉教授
 - 谷山茂 大阪市立大学名誉教授 京都女子大学名誉教授
 - 坪田直鎮 国立歴史民俗博物館長 東京大学名誉教授
 - 中井信彦 奈良国立文化財研究所長
 - 橋本不美男 早稲田大学文学部教授
 - 林大 国立国語研究所名誉所員
 - 古島敏雄 東京大学名誉教授
 - 松田智雄 東京大学名誉教授
 - 宮川満 羽衣学園短期大学長 大阪教育大学名誉教授
 - 山本達郎 東京大学名誉教授
- 国文学研究資料館運営協議員名簿
- 任期 昭和59年8月1日、昭和61年7月31日
- 秋山 慶 東京女子大学文学部教授
 - 有吉 保 日本大学文学部教授
 - 今井源衛 梅光女学院大学文学部教授
 - 小林清治 福島大学教育学部教授
 - 小山弘志 国文学研究資料館長
 - 佐竹昭廣 成城大学文学部教授
 - 榎知彌 早稲田大学文学部教授
 - 棚保五郎 国文学研究資料館研究情報部長
 - 長谷川 強 国文学研究資料館文庫資料部教授
 - 秀村選三 九州大学経済学部教授
 - 尾藤正英 千葉大学文学部教授
 - 福田秀一 国文学研究資料館文庫資料部長
 - 藤村潤一郎 国文学研究資料館史料館教授

- 本田康雄 国文学研究資料館管理開発部長
- 松本隆信 慶應義塾大学附屬研究所道文庫長
- 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 安谷 秀 国文学研究資料館史料館教授
- 森 安彦 国文学研究資料館史料館教授
- 安澤秀一 国文学研究資料館研究情報部長
- 山中光一 国文学研究資料館文庫資料部教授
- 渡邊守邦 国文学研究資料館文庫資料部教授
- 国文学文庫資料収集計画委員会委員
- 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
- 今井源衛 梅光女学院大学文学部教授
- 菊田茂男 東北大学文学部教授
- 鈴木重三 白百合女子大学文学部教授
- 富山 泰 四天王寺国際仏教大学文学部教授
- 永井義憲 大妻女子大学文学部教授
- 藤平春男 早稲田大学文学部教授
- 馬淵和夫 中央大学文学部教授
- 水原 一 駒澤大学文学部教授
- 室木彌太郎 仁愛女子短期大学教授
- 米原正義 国学院大学文学部教授
- 文庫目録委員会委員
- 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
- 池内輝雄 大妻女子短期大学部教授
- 遠藤 宏 成城大学文学部教授
- 大矢武師 東京家政学院短期大学教授
- 久保田 淳 東京大学文学部教授
- 小島孝之 立教大学文学部助教授
- 小町谷照彦 東京学芸大学教育学部教授
- 滝藤満義 横浜国立大学教育学部助教授
- 浜野卓也 山口女子大学文学部教授
- 原 道生 明治大学文学部教授
- 安田尚道 青山学院大学文学部助教授
- 吉田熙生 大妻女子大学文学部教授
- 情報処理システム運用委員会委員
- 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
- 石田晴久 東京大学大型計算機センター教授
- 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
- 井上 如 東京大学文庫情報センター教授
- 宇賀正一 国立国会図書館総務部電子計算課長
- 杉田繁治 国立民族学博物館第5研究部助教授

- 照井武彦 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
- 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
- 濱田啓介 京都大学教養部教授
- 星野 聰 京都大学大型計算機センター教授
- 堀内秀晃 青山学院大学文学部教授
- 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 国文学文庫資料調査員
- 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
- (北海道・東北)
- 菊地 仁 山形大学文学部助教授
- 藤原 進 弘前学院大学文学部助教授
- 廣瀬朝光 岩手大学人文社会科学部教授
- 松野陽一 東北大学教養部教授
- 湯澤賢幸 山形大学教育学部助教授
- (関東)
- 浅見和彦 成蹊大学文学部助教授
- 東 聖子 十文字学園女子短期大学講師
- 池田和臣 茨城大学文学部助教授
- 池田俊朗 京北高等学校教諭
- 市古夏生 白百合女子大学文学部助教授
- 大岡賢典 流通経済大学経済学部助教授
- 表 章 法政大学文学部教授
- 片桐 登 法政大学教養部教授
- 加藤定彦 立教大学一般教育助教授
- 兼築清恵 早稲田大学演劇博物館助手
- 川平ひとし 跡見学園女子大学文学部助教授
- 清登典之 放送大学園地玉教育センター助教授
- 猿田知之 茨城キリスト教短期大学教授
- 島本昌一 法政大学第二高等学校教諭
- 高田信敬 鶴見大学文学部講師
- 武井和人 埼玉大学教養部助教授
- 多田一臣 千葉大学文学部助教授
- 田中善信 武蔵野女子大学文学部助教授
- 棚橋正博 帝京大学文学部講師
- 谷地快一 東洋大学短期大学講師
- 辻 勝美 日本大学文学部講師(非)
- 寺澤行忠 慶應義塾大学経済学部教授
- 中野沙恵 東京女子医科大学医学部講師
- 西澤美仁 実践女子大学文学部講師

- 延廣真治 東京大学教養学部助教授
 萩原恭男 大東文化大学文学部教授
 森川 昭 東京大学文学部助教授
 和田博通 山梨大学教育学部助教授
(中部)
 秋間康夫 同朋大学文学部助教授
 稲垣泰一 金城学院大学文学部教授
 稲田篤信 高山大学教養部助教授
 木越 治 金沢大学教養部助教授
 坂田 新 愛知県立女子短期大学助教授
 鷹尾 純 愛知淑徳短期大学助教授
 滝澤貞夫 信州大学教育学部教授
 富田志津子 神戸学院女子短期大学講師(非)
 長島弘明 名古屋大学文学部講師
 長友千代治 愛知県立大学文学部教授
 西村 聡 金沢大学文学部講師
 長谷川 端 中京大学文学部教授
 服部 仁 同朋大学文学部助教授
 二澤久昭 長野工業高等専門学校教授
 船城俊太郎 新潟大学文学部助教授
 矢羽勝幸 長野工業高等専門学校講師
(近畿)
 赤瀬信吾 京都府立大学文学部助教授
 伊井春樹 大阪大学文学部助教授
 宇城由文 京都女子大学短期大学部講師(非)
 大高洋司 甲南女子大学文学部助教授
 大取一馬 龍谷大学文学部助教授
 加美 宏 同志社大学文学部教授
 小尾暢子 大阪教育大学教育学部助教授
 小林健二 大谷女子大学文学部講師
 櫻井武次郎 親和女子大学文学部教授
 島崎 健 京都大学教養部助教授
 竹下 豊 大阪女子大学文学部講師
 田中 登 帝塚山短期大学助教授
 永井一彰 奈良大学文学部助教授
 藤田真一 追手門学院大学文学部助教授
 松林靖明 帝塚山短期大学教授
 山本登朗 光華女子大学文学部助教授

- 石川 一 徳島文理大学文学部講師
 位藤邦生 広島大学文学部助教授
 田村憲治 愛媛大学法文学部助教授
 松原秀明 金刀比羅宮國書館嘱託
 宮田 尚 梅光女子学院短期大学部教授
 山口真琴 高知大学文学部講師
 山崎 誠 広島女子大学文学部助教授
(九州)
 井上敏幸 福岡女子大学文学部教授
 小川豊生 大分工業高等専門学校講師
 金原 理 熊本大学文学部教授
 若木太一 長崎大学教養部助教授
国文学文献資料特別調査員
 阿部泰郎 (財)元興寺文化財研究所非常勤研究員
 伊藤正義 大阪市立大学文学部教授
 片野達郎 東北大学教養部教授
 金沢規雄 宮城教育大学教育学部教授
 黒田 彰 愛知県立大学文学部講師
 小椋嶺一 京都女子大学文学部助教授
 佐藤恒雄 香川大学教育学部教授
 沢井耐三 愛知大学文学部教授
 竹内千代子 京都府立鳥羽高等学校講師
 土井洋一 学習院大学文学部教授
 名和 修 (財)陽明文庫主事
 橋本直紀 羽衣学園短期大学助教授
 安田文吉 南山大学文学部助教授
 山下宏明 名古屋大学文学部教授
 渡辺憲司 梅光女子学院短期大学部教授
国際日本文学研究集會委員会
 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
 池田 重 青山学院大学文学部教授
 ドナルド・キーン コロンビア大学教授
 アラン・ターナー 清泉女子大学文学部教授
 芳賀 徹 東京大学教養学部教授
 長谷川 泉 学習院大学講師(非)
共同研究委員会
 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
 秋山 虔 東京女子大学文学部教授
 稲賀敬二 広島大学文学部教授

- 島津忠夫 大阪大学教養部教授
 神保五彌 早稲田大学文学部教授
 松崎 仁 立教大学文学部教授
古典籍総合目録委員会
 任期 昭和60年4月1日、昭和62年3月31日
 菊地勇次郎 大正大学文学部教授
 柴田光彦 跡見学園女子大学文学部教授
 田中久文 東京大学附属図書館事務部長
 堤 精二 お茶の水女子大学教育学部教授
 野村文保 国立国会図書館収集整理部国内図書課長
 森川 彰 梅花女子大学文学部教授
共同研究員
 任期 昭和60年4月1日、昭和61年3月31日
 平田真信 横浜国立大学教育学部教授
 藤田洋治 福岡工業高等専門学校講師
 加藤幸一 筑波大学大学院博士課程
 平林文雄 群馬県立女子大学文学部教授
 島田早苗 群馬県立前橋南高等学校教授
 神野藤昭夫 跡見学園女子大学文学部助教授
 三角洋一 東京大学教養学部助教授
 阿部好臣 日本大学文学部講師
 浜田義一郎 大妻女子大学名譽教授
 柏谷宏紀 日本大学文学部教授
 延廣真治 東京大学教養学部助教授
 宇田俊彦 戸敷女子短期大学教授
 石川俊一郎 慶應義塾大学大学院博士課程
 石川了 大妻女子大学文学部助教授
 竹村信治 金沢美術工芸大学美術工芸学部講師
 播摩光寿 文化女子大学短期大学助教授
 前田雅之 早稲田大学大学院博士課程
 吉原浩人 早稲田大学高等学院教授
 稲田利徳 岡山大学教育学部助教授

文献資料部事業報告

福田 秀一

今年も盛夏を迎え、各地で資料の調査やマイクロ収集の立会指導に汗を流しておられる調査員や文庫職員等関係者の方々の御労苦を思う毎日である。後述する松字文庫の調査のため連日何人かの調査員は当部に見えており、また調査や収集指導あるいは挨拶・打合せのために出張する当部教官の出入りも多い。

そうした活気・熱気の中で、恒例によりこの二月から七月までの当部の事業進捗状況の要点を、以下に記す。

昭和五十九年度国文学資料調査・収集結果(前号報告の追補)

一、調査

追加すべき所蔵者・文庫名としては、北海道東北地区に東北大学附属図書館(狩野文庫、新規に取組み、以後逐次継続の予定)、関東地区に松字文庫(予備調査)、近畿地区に西教寺・洛東遺芳館(予備調査)、水口町立図書館(同)、九州地区に長崎県立長崎図書館(予備調査)があり、前号所載の文庫の中に調査点数の増えたものもあって、国内の総調査数は八、五〇四

点となった。その中には前号分に引続いて、中京大学附属図書館(大橋コレクション)・東大寺図書館以下、中京・関西地区の多数の文庫について、リストあるいはメモの形で情報を寄せて下さった篤志の個人があり、水口町立図書館の如きは、それをきっかけに当部でも有益な予備調査を行うことができた。なお、海外資料については別項に述べる。

二、収集

前号報告以後のものとしては、関東地区に宮内庁書陵部、中国四国地区に多和文庫がある。因みに前者は十余年前に許可を得たリストを毎年消化する形で進めているが、そのリストには書陵部の特長である中古・中世の歌書・連歌書や叢書類が中核を占めており、一昨年までに歌書・連歌書はかなり終って、昨年は叢書を撮影した。一方、多和文庫は、これも歌書・有職故実書などの宝庫であるが、文庫側の御理解により数年計画でほぼ全点をマイクロフィルムに収めることとなり、昨年度に開始した。昭和六十年国文学資料調査・収録

計画(国内)

これについては、例年通り昨年末から準備を始め、十二月及び今年五月の収集計画委員会の検討も経て、調査は六十二箇所七、八二〇点、収集は四十一箇所六四四〇点を、年度当初には計画し、この旨を、五月の調査員会議に説明して了承を得た。その結果、冒頭のように調査員各位が分担に従って活動して下さっているわけである。

その中で今年度に特記すべきものとして、松字文庫の調査・収集がある。同文庫は故伊藤松字翁の蒐書で現在は講談社の所蔵、特に俳書のコレクションとして知られている。戦災を受けたために本の損傷がかなりひどく、そうした本こそできるだけ早く当館として調査し記録を残すとともに、せめて現在読める形をマイクロフィルムに残すようにと、先年来収集計画委員会でも言われていたが、今般講談社及び文庫担当者の方々の御理解を得ることができ、今年度と来年度との二年間で、活字本その他若干の分野を除き俳書を中心とする二六〇〇点を調査・撮影させて頂けることになった。その作業は第四室客員雲英教授をはじめ多

くの調査員にお願いして七月の夏休み期間を充てて頂いているが、これに際して雲英教授のお口添えもあって講談社から今夏の調査・撮影分を借用することができ、当館の一角(客員研究室等)を作業場所とすることができたのは、甚だ幸であった。

海外資料の調査・収集

前号報告以後、次のような進展を見ている。

一、(国立)ソウル大学校図書館蔵書(川京城帝大本)

本年三月、かねて撮影希望を出しておいた「万葉集抄」(写二〇冊)・「源氏物語」(室町写五二冊)以下刊写本五五五点の撮影フィルムが当館に届いた。ソウル大学校側では間紙を入れるなど相当の手数をかけて協力して下さいと仄聞している。当館としては御礼に寄贈すべき複写物を目下作成中であるが、先方の御好意にあつく御礼申し上げます。

二、国立台湾大学研究図書館(旧台北帝大本)

前号に記した通り、本年二・三月に当部より福田以下四名の教官が文部省海外学術調査科学研究費補助金(略省「海外科研」)で二週

間出張し、例によって図書館側の好意ある御理解を得て、若干残っていた未整理図書を大略の分類に基づいて整理排架すると共に、整理済図書につき、棚別に排架短冊を挟みながらCカードにリストアップする作業を行なった。その結果、滞在中に一、〇二〇点の調査(Cカード)を行うことができたが、これは同図書館の別置和装本(旧台北帝大図書館文研究室本、但し島居氏により一応調査済の上田・長沢・桃木の三文庫は含まず)の半分強に当る。なお、これと平行して現地の撮影業者の実態調査も行い、その設備・技術等も確かめ得た。

本年度も海外科研がほぼ申請通り認められたので、九月下旬から十月中旬までの間に、当部教官五名(小峯・新藤・母利・福田・長谷川、出発順)に鈴木孝庸(新潟大)・井上敏幸(福岡女子大)両氏の応援を得て計七名が、各自約一〜三週間(多くの者は十五日)の日程で出張し、今春残した分のリストアップ(Cカードとり)と一部主要書籍の細目調査とを行う予定である。

の雲英末雄氏を迎えた。前述の松宇文庫調査の中心になって頂くため、併せて広く俳諧資料の調査研究に従事して頂いている。助教(併任)は今年初めての試みとして前期・後期各半年に分け、前期は前述の鈴木孝庸氏(新潟大)、後期は高橋亨氏(名古屋大)にお願いすることにした。鈴木氏には先年来継続の彰考館目録作成に關して軍記物語分野に協力を乞い、高橋氏には後期に当館が外国人研究員(客員教授)を招いて行う予定の平安時代物語文学に関する共同研究に参加して頂くつもりである。

第一〜三室 この三月に阿部助手が母校日大へ転出し、後任として吉海助手を迎えた。他の八名は昨年度の間であるが、今年度は別項に記される共同研究に参加しているメンバーも多く、また第三室は松宇文庫調査・収集の裏方をも果たすなど、全員奮励中である。調査員各位や各地の図書館・文庫等と直接接する部局として、失礼や遺漏のないよう努めているつもりであるが、お気づきの点は御叱正賜りたく、今回もお願ひ申上げる。

第四室

今年度は教授として早稲田大学

(文献資料部長)

文庫紹介 ⑥

刈谷市立刈谷図書館(村上文庫)

村上文庫は、村上家(刈谷藩の医師)が、襲蔵した書籍に、幕末の国学者村上忠順(二二二八四)の収集・書写した本及び彼の著書が加わって形成された約二五〇〇冊のコレクションである。これを大正三年に刈谷市内の藤井清七・六戸俊治の両氏が買い上げ、刈谷市に寄贈したものである。その内容は、文学・語学の他、神祇、宗教、哲学、教育、地理、法制、理工学、医学などの多岐に亘る。また忠順の自筆写本は膨大な数に及び、著書も七七種三八〇冊に達している。これらの内「蓬廬雜鈔」

谷図書館と地元研究者などの御理解、御協力を得て、設立直後の昭和四八年度から調査を始め、五一年度からは撮影もしている。そのフィルムは、整理し利用できるようになった書目だけでも四九〇〇点に達している。今後も継続して撮影させていたたく予定である。

村上文庫の目録は、当初森銃三氏によって分類整理され、「刈谷町立刈谷図書館分類目録」として謄写刊行(大正六、昭和一一再刊)されていたが、昭和五三年に、同館より「村上文庫図書分類目録」として、新に編集刊行された。また「蓬廬雜鈔」の内容細目は、同目録及び「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八〇」に掲げられている。後者には「梅処慢筆」の内容細目もある。

は、忠順(蓬廬は忠順の号)が折にふれ諸書から抄録したものを中心とした二二〇冊に及ぶ叢書である。国学者、歌人としての忠順を知る第一級の資料であるばかりか、今日の国文学者にとっても価値を有する貴重なものである。(本書ならびにもう一つの叢書「梅処慢筆」については築瀬一雄氏の紹介が「古典文学会々報」46号にある)

国文学研究資料館では、市立刈

〒448 愛知県刈谷市城町二の二四
Tel 〇五六六(二二)一一二一〇

研究情報部事業報告 棚町 知彌

本年度から、マイクロ資料目録のデータベース化(通巻・コンピュータ検索)利用の当館閲覧室内での試行がその緒に付いた。在来「年鑑」のかたちで学界に提供してきた研究論文情報についても、その近い将来においてのデータベース化・コンピュータ検索サービスへの準備が喫緊の課題となっている。人員・予算のきびしい情勢のもとで、とても充分の対応はできないが、この四月より部内に「臨時論文検索室」のユニットを新たに設けて、後述のように、情報室所属教官の併任と非常勤職員一名により、この課題にとりくむこととなった。

この五十九年版以降その編成が変更されることになった。すなわち、従来、内容の説明をも行なっていた「単行本解説」は、書誌的事項のみを記した目録となる。これは出版量の増大に現在の人員と予算では対応しきれなくなったためである。但し、論文集(記念論文集、講座など)は個々の論文を「雑誌紀要論文目録」の部に組入れ、その欠を補うようにした。資料集もこれに準じて扱っている。更に、六十年版からは「学界展望」も廃止される。研究の拡大、分化に伴い、広い分野に互つての展望が困難になって来ていることがその理由である。

情報室は、館報の発行、新聞情報収集、国際日本文学研究集会の開催という従来の業務を引き続き行うほか、本年度から新たに部内措置で設けた臨時論文検索室における論文データの整備に全面的に取り組むこととしている。

以上二点の簡略化・廃止にもかかわらず、論文数そのものの増大と単行本所載論文の雑誌論文目録への組入れ(五十九年版では千件を超える)によって年鑑の記載量はやはり増大していくと予想される。

編集室

三月末に「国文学年鑑」(昭和五十八年)を刊行、引き続き五十九年版の作成を進めている。

情報処理室

電子計算機の運用・運転を除く昭和五十九年度事業は、以下のよう

定常的な業務として、

① 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(一九八四)七六七頁、索引部(一四六頁)

② 同累積簡略版(業務用)

③ 国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録(一九八五)

の版下作成を行なったほか五十九年度は、共同研究の枠内でシステム開発を行っていた連歌目録作成システムを業務システムとして開発し、

④ 連歌資料のコンピュータ処理の研究(目録篇一九八頁、索引篇五八六頁)

の版下作成を行った。

(2) データ入力等

上記目録用のデータの入力等の運用のほか文字フォント(十九文字)の作成を行った。

(3) システム開発

以下のシステム開発を行った。

① 古典籍総合目録作成システム

昨年度までに開発されている書誌データ入力部、著作データ入力部の各システムの運用システムを作成した。ついで著者データの入力部システムの開発を実施した。

② 古典作品典拠ファイルシステム
データ入力部のシステム設計を

行った。すなわち、データ入力、校正に対するサポートシステムを用意した。

③ 運用管理システム

当初計画のうち、データ分析作業の方針確定、及び各種調査を実施し、次年度への指針とした。

④ 連歌目録作成システム

目録および索引作成と、それらの版下打出しシステムを作成し、その運用を行った。

(4) その他

① 日本語データ作成、校正用のシステムをKSLから画面エディタのDEDITへ全面的に移行した。

② 大学間コンピュータネットワークに参画し、当面ユーザとして試験運用を開始した。

③ マイクロ資料目録データの累積を行い、検索システムにロードし、試験運用を開始した。

④ マイクロ資料目録作成業務のバッチ処理からメニュー選択による対話処理への移行を行った。

臨時論文検索室

研究論文データのオンライン検索を可能とするように、従来システム開発のため試行的に行ってきたデータの入力および検索キー付

け、カナ付けなど検索のためのデータ整備を全面的に実施することになった。

現在論文データの入力・整備状況は、

①昭和16～37年のデータについては、昨昭和五十九年三月刊行の『国文学研究文献目録（昭和16～37年）』の版下作成のために既に入力され、索引のために作家名、作品名がキーとして付加されている。

②昭和38～55年のデータについては、既刊の『国文学研究文献目録』および『国文学年鑑』のデータが入力され、その配列の標記項目等が検索キーとして付加されている。この内昭和46～55年の十年間のデータについては、

オンラインの検索システム（ORION）に載せて実験的な試用を行っている。

③この内昭和55年のデータについては昨昭和59年度に編集室において、昭和37年以前のデータと整合性を保つよう鋭意見直しを行い、作家名・作品名のキーを付加した。

④しかし昭和56年以降のデータについては全く未着手である。そこで臨時論文検索室では、昭和37年以前と昭和55年のデータを、検索キーの初期典拠として、これらとの整合性をはかりながら38～54年のデータの見直し整備を行うよう作業を進めている。

（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

当部が担当する業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス、及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は、後に述べるように今期も順調に進展した。

事業開始後六年目を迎えた典籍籍総合目録作成事業は、当館の主要な事業として進行している。これに関連して、前号で紹介した古

典作品典拠ファイル作成事業も基本計画に従い作業を進めている。

なお、四月一日付で東京大学文献情報センターへ転出した石井啓豊受入係長の後任として、米澤章雄事務官が着任した。

(一) 整理閲覧室

(1) 受入業務

昭和五十九年度の受入資料数はマイクロ資料（ロールフィルム一、四六五リール、紙焼写真本四、八九九冊）、図書（二、三五四冊）、逐次刊行物（継続受入等約一、五〇〇誌）、雑誌製本（三一五冊）であった。その結果、昭和五十九年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

昭和六十年度も、予算の確定に伴い、例年どおり資料の受入れを行っており、ひきつづき、図書選定小委員会その他の協力を得ながら国文学関連資料の総合的な収集・受入れに努めたい。

(2) 典籍籍総合目録作成事業

書誌データ約一万件の作成・パンチを行った。また、著作データ約七千件の作成・入力処理を行い、このうちの一部分と入力処理済の書誌データ（約四万九千件）の一部をデータベースへ登録して、典拠コントロールのテストにとりかかっている。

所蔵資料統計（昭和60年3月末現在）

資料種別	点数	冊(リール)数
マイクロ資料	マイクロフィルム*	67,146点 14,919リール
	マイクロフィッシュ	3,397点 10,008枚
	紙焼写真本	41,301点 35,115冊
図書(古書及び新刊書)	17,654点	58,755冊
逐次刊行物	2,891誌	68,740巻号冊
寄託図書	141点	178冊

*他に紙焼写真による収集(591点)がある。

(3) 整理業務

古典作品典拠ファイルは、基本計画に従い作業を進めている。年度末から現在まで約四万件余のデータのパンチを終え、昨年分を加えると約五万件がパンチ済となっている。現在パンチデータの校正作業を主に行っており、引き続きコンピュータシステムを利用した形式変換作業を予定している。

新刊書、和古書の整理も予定通り進み、帙の作成や和古書の補修も例年規模で行った。

二月に開かれた貴重書指定小委員会で、『雑屋立圃絵入書巻二(写・

一軸)が当館の六十二点目の貴重書に指定された。

マイクロ資料については、「マイクロ資料目録一九八四年」を刊行した。静岡県立中央図書館(葵文庫)他二十二文庫八、〇八七点が収録されている。一九八五年版に収録予定のデータ約四、五〇〇点も既に整理、入力を終えている。

(4) 閲覧業務

昭和五十九年度は、入室者数が八、三〇九人(一日平均三〇人)、文献複写が一六、四四五件(一日平均六〇件)で、いずれも前年度に比べて増加した。特に文献複写は、前年度の一六%増であった。利用登録者数も累計(三月末まで)で一三、一二二人に達した。

また、相互利用の申込受付も八四四点で、前年度を大きく上回った。当館では、昭和五十六年三月に、相互協力についてのリーフレット「共同利用のてびきー相互協力サービス案内」を作成したが、このたび、その改訂版を作成し、図書館・文庫等、関係者各位に配付した。なお、例年通り、三月末に蔵書点検、四月末に資料のくん蒸を実施した。

(5) マイクロ室業務

多和文庫他一八文庫、四三四りールの作業用ネガフィルムを作製した。閲覧用ポジフィルムについては、武生市立図書館・秋田県立秋田図書館(時雨庵文庫)等、三五四りールを作製した。紙焼写真本は、三四三りールの焼付、二、〇一六冊の製本、整理を行った。他に文献複写サービスのための撮影とポジフィルムの作製を行った。

(二) 参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第22回公開講演会(6月8日、於当館)
「連歌研究の明日」棚町知彌氏(当館教授)、「アメリカにおける日本学」坂坂元氏(創価女子短期大学教授)

●常設展示

第26回「古典文学の参考図書」(1月16日～3月23日)
第27回「古典文学の流れ」(4月8日～6月22日)

なお、昨夏の第7回夏期公開講演会の筆録集である『日本文学と

中国文学(国文学研究資料館講演集6)』を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。(整理閲覧部長)

「国文学研究資料館資料利用規程」の改正について

当館のマイクロ資料は、昭和四十七年五月の創設以来、原資料所蔵者の御理解と御協力をたまわり鋭意収集(撮影)に努め、昭和六十年三月現在、ロールフィルム二四、九一九りール、その他の形態のもの若干を加えて総点数は七一、一三四点の多きを数えるに至っております。収集点数の増加に比例して利用状況も昭和五十二年七月の開館以来逐年増加を辿り、昭和五十九年度においては、閲覧室入室者数八、三〇九人、相互利用の申込受付八八四点、文献複写は一六、四四五件を数えています。また、開館以来の登録者総数は一三、一二二人になっていきます。

このたび、御協力たまわった原資料所蔵者、また、利用者の数的増大の状況に円滑に対応するため、昭和五十二年二月一日に制定された「国文学研究資料館資料利用規

程」を見直し、所要の改正を行いました。

その概略は、次のとおりであります。

一、「閲覧の場所」について、現状に即して内容を改めたこと。(第5条関係)

二、「特別調査閲覧室」について、同様の理由で廃止したこと。(第12・13条関係)

三、「複写サービス」について、定義したこと。(第14条関係)

四、「複写受付時間」について、明示したこと。(第23条関係)

五、「資料の貸出」について、現状に合わせて改めたこと。(第24条関係)

国文学研究資料館資料利用規程

昭和52年2月1日制定
昭和52年12月20日一部改正
昭和54年2月6日一部改正
昭和60年8月1日一部改正

第1章 総則

(適用範囲)

第1条 国文学研究資料館(以下「当館」という。)における図書・

- マイクロ資料・文書等の資料(以下「資料」という。)の利用については、この規程の定めるところによる。ただし、史料館における資料の利用については、別々に定めるところによる。
- (利用の方法)
- 第2条 この規程による資料の利用の方法は、閲覧、複写、館外貸出及び参考調査とする。
- (利用の料金)
- 第3条 資料の利用は、別に定めるものを除き無料とする。
- (利用資格)
- 第4条 資料を利用できる者は、学術研究のために当館の資料を必要とし、かつ、次の各号の一に該当する者とする。
- (1) 学校の教員及び調査研究機関の研究員
- (2) 大学の学生及び大学院の学生
- (3) その他館長が適当と認める者
- 第2章 閲覧
- (閲覧の場所)
- 第5条 資料の閲覧の場所は、次の各号に定めるところとする。
- (1) 図書・マイクロ資料
- (2) 雑誌
- (3) 参考図書
- (4) 史料館における資料
- (閲覧時間)
- 第6条 資料の閲覧時間は、午前9時30分から午後4時30分までとする。
- 2 前項の閲覧時間は、都合により短縮することができる。
- (閲覧業務を行わない日)
- 第7条 閲覧業務を行わない日は、次の各号に該当する日とする。
- (1) 日曜日
- (2) 国民の祝日及び振替休日
- (3) 国家的儀礼に係る日
- (4) 創立記念日(5月1日)
- (5) 年末年始(12月27日から31日まで及び1月2日から5日まで)
- (6) 毎月の末日。ただし、その日が日曜日に当たるときは、その前日とし、4月において、その日が日曜日又は月曜日に当たるときは、28日とする。
- (7) 蔵書点検の期間(3月末1週間)
- (8) 書庫くん蒸の期間(4月末から5月上旬にかけ5日間)
- 2 特に必要がある場合には、臨時に閲覧業務の全部又は一部を休止することができる。
- (閲覧の手続)
- 第8条 閲覧者は、身分証明書又は学生証を提示して、利用者の登録を行い、資料利用カード(別紙様式1。以下「利用カード」という。)の交付を受けなければならない。
- 2 入室に際しては、係員に利用カードを提示し、利用カードケース(以下「閲覧者記章」という。)の交付を受けて装着するものとする。
- (資料の請求)
- 第9条 閉架資料の閲覧の際は、資料閲覧貸出請求票(別紙様式2。以下「資料請求票」という。)に所要の事項を記入し、利用カードと共に係員に提出するものとする。
- (資料の返納)
- 第10条 資料は、必ず係員へ返納すると共に利用カードを提示し、資料請求票に押印を受けなければならない。
- (退室の手続)
- 第11条 退室の際は、閲覧者記章を係員に返納するものとする。
- 第12条及び第13条 削除
- 第3章 複写
- (複写サービス)
- 第14条 資料の複写は、複写を希望する者の依頼に基づき、当館が行う(以下「複写サービス」という。)ものとする。
- (複写をすることのできる資料の範囲)
- 第15条 複写は、当館が収集した資料について利用者の学術研究の用に供するために1人につき1部行うものとする。ただし、著作権法の適用される資料については資料の一部分を1人につき1部行うものとする。
- 2 前項ただし書による資料の複写で著作権法上適法な範囲で、かつ、館長が適当であると認められる場合(以下「特別複写」という。)はこの限りでない。
- 3 次の各号に掲げる資料は、複写することができない。
- (1) 原資料所蔵者との契約において複写の禁止を定めたもの
- (2) 財産権及び著作権の侵害となるおそれのあるもの
- (3) その他館長が複写することを

不相当と認められたもの

(複製物の種類)

第16条 複製物(以下「複写サービスによる複写物」をいう。)の種類は、次の各号に掲げるとおりとする。

(1)雑誌、図書(洋装本)に関しては、電子複写

(2)マイクロ資料に関しては、フィルム(ボジ)、紙焼写真又はフィルムによる電子複写

(3)図書(和装本)に関しては、フィルム(ボジ)、紙焼写真又はフィルムによる電子複写

(複写の申込)

第17条 複写を依頼しようとする者は、所定の資料複写申込書(別紙様式4)に所要の事項を記入して申込み、承認を受けなければならない。

2 代理人が申込み場合は、複写を依頼しようとする本人から委任を受けた者であることを証するに足りる文書を、資料複写申込書に添付しなければならない。

(特別複写許可願)

第18条 第15条第2項に定める特別複写を依頼する者は、その必要とする理由を明記した資料複写申込書を提出し、承認を得な

ければならない。

(複製物の二次使用の禁止)

第19条 複写及び特別複写による複製物は、当館及び原資料所蔵者に無断で再複製し、刊行し、翻刻し、販売し、譲渡し、又は交換物として使用してはならない。

(申込みの不承認)

第20条 次の各号に掲げる場合は、申込みを承認しない。

(1)申込みの書類の記載が不備であるとき。

(2)この規程及び当館で定める他の規定に違反したとき。

(申込みの制限等)

第21条 当館の複写処理能力をこえる複写の申込みがあった場合は、その申込みを制限し、又は承認しないことがある。

(複写の料金)

第22条 複写の申込みをした者は、別に定める料金を納めなければならない。

(複写受付時間)

第23条 資料の複写受付時間は、第7条に定める日を除き、毎日午前9時30分から、平日の場合は午後3時30分までとし、土曜日の場合は午前11時30分までとする。

第4章 館外貸出

(資料の貸出)

第24条 資料の貸出しは、原則として行わないものとする。ただし、当館が収集したマイクロ資料のうち、原資料所蔵者から紙焼写真の複写サービスを認められた資料については、紙焼本を貸出すものとする。

(貸出しをする資料の数)

第25条 一度に貸出すことのできる資料の数は、10点以内とする。

(貸出期間)

第26条 資料の貸出期間は、翌日の正午までとする。ただし、翌日が第7条に該当する場合は、その翌日の正午までとする。

(貸出しの手続)

第27条 資料の貸出しを受けようとする者は、資料請求票に所要の事項を記入し、利用カードと共に係員に提出して承認を受けなければならない。

(資料の返納)

第28条 資料は、必ず係員へ返納すると共に利用カードを提示し、資料請求票に押印を受けなければならない。

(貸出受付時間)

第29条 資料の貸出受付時間は、

第7条に定める日を除き、毎日午前9時30分から午後4時30分までとする。

第5章 参考調査

(参考調査)

第30条 質問、相談等の参考調査の依頼に対しては、参考図書等の文献に基づいて調査し、回答を行うものとする。

(参考調査の範囲)

第31条 参考調査の範囲は、原則として、依頼事項に関する参考文献の紹介及び依頼事項に関する文献を所蔵する文庫、図書館等についての情報の提供とし、学術研究の目的に沿わない調査等については、回答を行わない。

2 前項前段の場合にあつても、特に経費又は時間を要し、他の参考調査業務に支障を及ぼすおそれのある調査については、行わないことがある。

(参考調査の申込みの方法等)

第32条 参考調査を依頼する者は、文書、口頭、その他の方法により申込みことができる。

(参考調査受付時間)

第33条 参考調査の受付時間は、第7条に定める日を除き、毎日午前9時30分から午後4時30分

までとする。ただし、文書による場合はこの限りでない。

第6章 相互協力

(大学の図書館等に対する複写サービスと貸出)

第34条 次の各号に掲げる機関からの複写及び貸出しの申込みについて必要な事項は相互協力要項(昭和52年8月26日館長決裁)の定めるところによる。

(1)国立学校設置法(昭和24年法律第150号)又は学校教育法(昭和22年法律第26号)の規定に基づく大学等の図書館又は研究所

(2)国立又は公立の調査機関

又はこれに準ずる機関

(3)図書館法(昭和25年法律第118号)の規定に基づく図書館、文庫又はこれに準ずる機関

(4)その他館長が適当と認める機関

関

第7章 雑則

(利用の制限)

第35条 この規程及び当館が定める他の規定に違反した者、職員等の指示に従わない者及び不都合の行為をした者に対しては、利用を停止することができる。

2 他人に迷惑を及ぼす者又はそ

のおそれのある者に対しては、入館をことわり、又は退館を命ずることができる。

(賠償の責任)

第36条 利用者の責により、資料を亡失又は損傷した場合は、当該利用者がその賠償の責任を負うものとする。

(財産権、著作権のある資料の使用上の責任)

第37条 資料及びその複製物の利用により、財産権、著作権法上の問題が生じた場合には、すべて当該利用者が、その責任を負うものとする。

附則

この規程は、昭和52年2月1日から実施する。

この規程は、昭和52年12月20日から実施する。

附則

この規程は、昭和54年2月6日から実施する。

附則

この規程は、昭和60年8月1日から実施する。

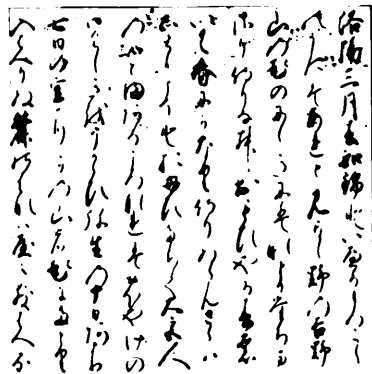
(別紙様式省略)

新収資料紹介 ②③

吉野一覽記

飛鳥井雅章の歌文紀行。一軸。表紙は金欄千歳緑色地に牡丹唐草模様。縦二四・六×横二一・五。見返しは金箔地に銀箔ちらし。本文紙は斐紙、唐草繫文様の下絵、全長二二〇。外題内題ともなし。箱入。箱の上書に「飛鳥井雅章卿吉野一覽記一卷」とあり、古筆了意と了保の極札を付す。奥書は「右応或人之所望書以与之者也明曆第三暮春中旬(花押)」とある。一般に「吉(芳)野紀行」として知られるもので、多く他の作品と合写されたり叢書に収録されるなどしてかなり流布したものとかわれ、版本も二種(一種は単独、一種は「和歌伊勢海」に収録)現存する。雅章(延宝七〜一六七九)年六九歳)は後水尾院時代の代表的な堂上歌人であり、能書家としても知られる。しかして、本書の奥書にもあるが、乞われて幾度か自身浄書して与えたらしく、すでに自筆が二本(一本吉田幸一博士蔵、一本東洋大学図書館蔵)存する。内、吉田本は「有馬の記」を含む特異な本文で、東洋大本は流布本系統である。本書も極札はともかく、筆跡から推しても自筆とみてよく、東洋大本に非常に近い流布本系統の本文である。さらに言えば、筆者はかつて、二本の自筆写本の他に少なくとも三本は自筆写本が存したであろうと推定した(「国文学研究資料館紀要」七号「芳野紀行」の解説参照)が、本書はその三本とは別のものと思われる。内容は一泊二日の行程での吉野花見旅行記である。旅行は承応三年三月十七日と推定されるが、本書はその三年後に浄書されたものである。(島原泰雄)

吉田本は「有馬の記」を含む特異



国文学研究資料館名誉教授の称号
授与

国文学研究資料館名誉教授称号
授与規程に基づき、昭和六十年七
月十八日付けで、次の四名の方々
に名誉教授の称号が授与された。

○市古貞次 明治四十四年五月生
昭和四十七年五月一日から昭和
五十七年四月一日まで館長とし
て在職。

○鈴木 壽 明治四十四年八月生
昭和四十二年四月一日から史料
館に在職、引続き昭和四十七年
五月一日から昭和五十二年四月
一日まで教授として在職。

○古川清彦 大正六年五月生
昭和四十七年五月一日から昭和
五十六年四月一日まで教授とし
て在職。

○松田 修 昭和二年十月生
昭和四十七年七月一日から昭和
五十六年三月三十一日まで教授
として在職。

昭和60年度科学研究費補助金
小山弘志 総合研究(A)

研究課題 連歌資料の全国的総
合調査並びに連歌作品年
表の編纂

渡邊守邦 一般研究(B)
研究課題 国文学資料を中心と

した蔵書印の「総引き式
索引」の作成をめざす研究
小山弘志 試験研究(1)

研究課題 国文学における大量
多種データ運用管理のた
めの知識ベースシステム

母利司朗 奨励研究(A)
研究課題 「附賞記」を中心資
料とした近世初期連歌壇・
俳壇の総合的研究

福田秀一 海外学術調査
研究課題 国立台湾大学研究図
書館蔵 日本文学関係資
料の調査撮影
| 在外日本文学関係資料
の総合的研究 |
評議員会議の開催について

本年度第一回評議員会議が七月
十八日(木)に当館中会議室にお
いて阿部議長ほか十八名の出席を
得て開催され、議事は、名誉教授
の承認、管理運営の概況、昭和五
十九年度事業報告及び昭和六十
一年度概算要求等について評議が行
われた。

運営協議員会議の開催について
本年度第一回運営協議員会議が
七月九日(火)に当館中会議室に
おいて小山議長ほか十七名の出席
を得て開催され、議事は、名誉教

授候補予定者についての審議が行
われ、四名の候補者を決定し、評
議員会議に上程することとなった。

また、管理運営の概況、昭和五
十九年度事業報告及び昭和六十
一年度概算要求等について協議が行
われた

委員会日誌 昭和六十年
五月 十六日 国文学文献資料収
集計画委員会(第
一回)

五月 十七日 国際日本文学研究
集会委員会(第一回)
五月 二十一日 国文学文献資料調
査員会議(総会)
六月 十四日 共同研究委員会(第
一回)

七月 十六日 情報処理システム
運用委員会(第一回)
八月 十五日 国際日本文学研究
集会委員会(第二回)
八月 二十二日 文献目録委員会(第
一回)

人事異動(昭和六十年三月、昭和
六十年七月)
(採用)昭和六十年四月一日付
文部教官(文献資料部助手) 吉海
直人
(転入)昭和六十年四月一日付
文部事務官(管理部長) 桜井金也

(大阪大学より)
文部事務官(会計課課長補佐) 太
田重男(横浜国立大学より)
(定年退職)昭和六十年三月三十
一日付
文部事務官(管理部長) 小泉 武
(辞職)昭和六十年三月三十一日
付

文部教官(文献資料部助手) 阿部
好臣(日本大学就職)
(転出)昭和六十年四月一日付
文部事務官(会計課課長補佐) 寺
尾昌剛(明石工業高等専門学校へ)
(客員教授)昭和六十年四月一日
昭和六十一年三月三十一日
文献資料部 雲英末雄(早稲田
大学教授)

(兼任)昭和六十年四月一日、昭
和六十年九月三十日
文部教官(文献資料部助教授) 鈴
木孝庸(新潟大学助教授)
国文学研究資料館永年動続者の表

影
国文学研究資料館永年動続者表
彰規程に基づき、昭和六十年五月
一日付けで、次の方々に表示状を
授与し、記念品の銀盃を贈呈した。
○寺尾昌剛(前管理部会計課課長
補佐)
○秋山 健(管理部会計課)

○秋山 健(管理部会計課)

○秋山 健(管理部会計課)

○秋山 健(管理部会計課)

○秋山 健(管理部会計課)

利用者へのお知らせ

◆資料利用規程の改正について

このたび「国文学研究資料館資料利用規程」の一部が改正になりました。

資料利用規程は、当館の資料利用全般に関する規則で、昭和五十二年七月の開館に先立って、昭和五十二年二月に制定されました。以来、昭和五十二年十二月と五十四年二月に一部改正が行われ、今回が三度目の改正になります。

開館以来八年が経過し、所蔵資料の増加、利用者の増大の状況に円滑に対応するため、今回、見直しを行ったものです。

12ページに資料利用規程全文を掲げました。詳しくは、そちらをご参照ください。

◆貴重書の閲覧について

貴重書の閲覧については、カウンターで「特別別置資料・寄託資料閲覧許可願」(要印)を提出していただき、閲覧室の貴重書閲覧コーナーで閲覧していただくこととなります。

以下、貴重書の一覧を請求番号順に掲げます。貴重書の請求記号

の先頭の番号は「99」です。現在貴重書の点数は六十二点です。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------|--------------|--------------|---------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|--------------|--------------|--------------|---------------|-------------|---------|-------------|---------------|-----------|---------------|------------|------------|--------------|----------|--------------|---------|-----------|-------------|-------------|-------------|--------------|---------------|-------------|------------|--------------|-------------|---------------------|--------------|---------------|--------------|------------|---------------|---------------------|-------------|------------|-------------|------------|---------------|----------|---------------|--------------|--------------|-------------|-----------|--------------|--------------|------------|-----------|-----------|-----------|--------------|------------|-------------|-------------|--------------|-----------|-------------|--------------|----------|------|
| 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 67 | 52 | 51 | 32 | | | | |
| 本居宣長書簡(写) | 名所都鳥(刊・元禄3) | 好色一代男(刊・天和2) | 宗祇連歌(写・室町末期) | 十六夜日記(写・江戸初期) | 曾我物語(刊・寛永頃) | 平家物語(刊・寛永1) | 太平記(刊・寛永1) | しつか(写・屏風貼付) | 火おけのさうし(写) | 法妙童子(写・江戸前期) | 唐糸草紙(写・江戸前期) | 連歌比況集(写・天文頃) | 伊勢千句註(写・永禄10) | 三部抄(写・天正18) | (写・文明頃) | 日吉社壇詠二十一首和歌 | 松花和歌集(写・江戸初期) | 続後撰和歌集(写) | 新古今和歌集(写・南北朝) | 新続古今和歌集(写) | 北山抄(今井似閑写) | 古今和歌集(写・元応1) | 古今和歌集(写) | 古今和歌集(冷泉為和写) | 源氏小鏡(写) | 賀茂真淵書簡(写) | 書置之事(今井似閑写) | 大蔵九郎囉子伝書(写) | 八幡大菩薩御縁起(写) | 転寝草紙(写・室町時代) | ささやき竹(写・江戸前期) | しつか(写・江戸前期) | 徒然草(刊・慶長頃) | 太平記(刊・慶長元和頃) | 休閑抄(写・慶長15) | 連歌新式追加并新式今案等(写・文龜1) | 人倫重宝記(刊・元禄9) | 万葉類葉抄(写・江戸中期) | 住吉物語(写・江戸前期) | 狭衣(写・江戸中期) | 義経記(刊・土佐少揆正本) | 連歌新式追加并新式今案等(写・永禄1) | 羅生門(写・江戸中期) | 節用集(刊・慶長2) | 倭玉篇(刊・慶長18) | 楠軍記(刊・元禄9) | 曾我物語(刊・元和寛永頃) | 太平記音義(刊) | 年中行事歌合(写・室町期) | 弘慈袖中策(刊・元和頃) | 統高僧伝(写・平安末期) | 落窪物語(刊・寛政6) | 若薙(写・天文5) | 連歌延徳抄(写・天文頃) | 洛陽名所集(刊・万治1) | 壁草(写・室町末期) | 水鏡(写・嘉吉頃) | 薬師通夜物語(刊) | 耶忠介公奏疏(刊) | 歌林良材集・竹園抄(写) | 嵯峨のかよひ路(写) | 離屋立園絵入書卷(写) | 東奥義塾図書館 X↓A | 伊達市開拓記念館 X↓B | (森文庫) X↓B | 大阪市立大学附属図書館 | 水府明徳会彰考館 E↓B | 所蔵者 変更内容 | 文庫No |

◆マイクロ資料のサービス区分の変更について

これまでマイクロ資料のサービス区分が変更になった場合、及びサービス区分について未回答であった原資料所蔵者から回答が得られた場合は、その都度、館報でお知らせしてまいりました。

今回、それらをまとめて掲載いたします。

- | | | | |
|---------|----------|-------|----------|
| 67 | 52 | 51 | 32 |
| 東奥義塾図書館 | 伊達市開拓記念館 | (森文庫) | 水府明徳会彰考館 |
| X↓E | X↓A | X↓B | E↓B |

昭和六十年秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加

する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。

以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会 ①下二七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版セクタ―内

近代語学会 ①下二六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇―五〇七

国語学会 ①下二一〇千代田区神田錦町三―一―武蔵野書院気付

②一〇月二六―二七日③宮城学院女子大学

古事記学会 ①下二一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部

部日本文学第二研究室

古代文学会 ①下二八二調布市小島町二―一八―三―二〇六村井

紀方

上代文学会 ①下二六二新宿区戸山一―二四―一早稲田大学教育

学部国語国文学研究室内

説話文学会 ①下二八三世田谷区

駒沢一―二三―一駒沢大学文学部

国語国文学研究室②一二月八日③

同朋大学

全国大学国語国文学会 ①下二一〇

一〇月二六―二八日③熊本大学

日③熊本大学文学部

中古文学会 ①下二七一豊島区目

白一―一五―一学習院大学国語国

文学研究室内②一二月一六―一

八日③熊本大学文学部

中世文学会 ①下二一六〇新宿区西

早稲田一―一六―一早稲田大学教

育学部梶原研究室内②一〇月一

二―一四日③宮島観光会館

日本演劇学会 ①下二一六〇新宿区

西早稲田一―一六―一早稲田大学

演劇博物館内②一二月二日③園

田学園女子大学

日本歌謡学会 ①下二一五〇渋谷区

東四―一〇―二八国学院大学文

学部第七研究室内②一〇月五―

六日③奈良教育大学

日本近世文学会 ①下二一六二新宿

区戸山一―二四―一早稲田大学

文学部神保五彌研究室内②一

月三〇―一二月一日③九州大学

日本近代文学会 ①下二二二文京

区目白六二―一八―一日本女子大

学文学部国文学科研究室内②一

〇月二六―二八日③熊本大学

日本口承文芸学会 ①下二一六〇新

宿区西新宿八―四―五財団法人

ラボ国際交流センター広報部気

付②一二月二日③ラボ教育セン

ター

日本文学協会 ①下二一七〇豊島区

南大塚二―一七―一〇②一〇月

二―一―一三日③東京都立大学

日本文学風土学会 ①下二一四四

崎市多摩区東三田二―一―一専修

大学文学部国文学研究室内②一

一月三〇日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会 ①下二九八〇仙台

市川内東北大学文学部内

俳文学会 ①下二六〇五京都市東山

区東山七条京都女子大学文学部

濱千代研究室内②一〇月五―七

日③四国女子大学

表現学会 ①下四八〇―一愛知

県愛知郡長久手町愛知淑徳大学

国文学科研究室内

仏教文学会 ①下二八三世田谷区

駒沢一―二三駒沢大学文学部国

文学研究室内(東部)下二六〇三

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

仏教大学高橋貞一研究室内(西

部)②一二月八日③同朋大学

万葉学会 ①下五五六吹田市千里

山東三関西大学国文学研究室内

②一〇月二六―二七日③国学院

大学百周年記念講堂

美夫君志会 ①下四六六名古屋市

昭和区八事本町一〇一中京大学

文学部国文学研究室内

和歌文学会 ①下二一三一九一文

京区本郷郵便局私書箱第二八号

②一〇月一八―二〇日③東京大

学文学部

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を

明記のうえ、郵送料(切手)を

同封して当館情報室あてお申

し込み下さい。

国文学研究資料館報 第二十五号

昭和六十年九月発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町二六、一〇

郵便番号一四二

電話(七八五)七三三(代)

印刷所 株式会社 三興